

「エゴイスト」の文体研究

小 山 浩 代

文体論の方法

文体研究は何を表現するかではなくて、いかに表現するかを追究するものである。われわれが「文体」という名を口にするときこれをどのように解するかによって議論の展開の方向は変わりうると思う。“le style, c'est l'homme”と考えるのはよいとしても、文体から直接に人間ないし個人の思考の様式や特性を引き出しうると考えると、どうしても intuitive な方法をとらざるを得なくなる。それでは talented critics には可能であっても、誰にでもできるというわけにはゆかない。そこでここではできるだけ objective な方法での文体研究を試みたいと思う。

文学に用いられる言語の基本的な目標は、内容の communication である。ただその communication を行う途上でいろいろの目的から表現の様式を変化させるであろう。そこで communication が主目的である部分の表現を仮に文体的な価値ゼロの場合とすれば、それに対する deviation から表現のもつ文体的価値が見出されるであろう。けれどもこれをあらゆる面で行うことは現在は不可能であるから、ここではその中の若干の点について考察することで満足しなければならない。

言語には周知のように phonological な面と semantic な面があり、その中間に grammar が存在して、これらすべての分野について deviation の問題が考えられる。さらにその中間に J.R. Firth (*Papers in Linguistics*, p. 194) のような collocation の段階が考えられ、いわゆる rhetorical devices も

当然文体に関係する。さらに sentence をこえた paragraph の構成, chapter の構造にも文体があるはずである。従って言語的な面での表現の特性をとらえ, さらにどのような rhetorical devices を作家が用いてどのような効果を狙っているかを確かめ, 次に, paragraph~chapter の構造上の特徴を発見し, 記述しなければならない。

しかし, それ以上にそれがどのように総合的にはたらいて, どのような芸術的効果をあげているかは鑑賞者によって異なる点であり, それはもはや語学的研究の域をこえている。もちろん人はそれぞれに aesthetic な鑑賞は行いうるであろうが, それがどのようなものであろうともここでは問題ではない。ここで行ないたいのは, 文体的見地からどのような事実が認められるかだけである。試みとして, George Meredith(1828—1909)の *The Egoist* (1879) という作品をえらび記述をすすめたい。

The Egoist における表現上の特異性

The Egoist の大体がいわゆる Standard English で書かれていることはいうまでもないが, その Standard English の範囲で, または特別な理由からその範囲をこえてどのような言語的な特性が認められるかをまず明らかにする必要がある。何故ならその上でこうした特異性と作家の意図とを対比しつつ解釈することによってこのような特異性のもつ表現上の意義が解明され, 文体的な価値が確認されると思われるからである。

ところで言語における各 level 即ち phonological, morphological, grammatical な面, さらに表現の技術としての rhetoric の面, これらすべての面にそれぞれ peculiarities があるはずである。しかし, 特性はこの各 level に均分されているわけではない。

§1 Sound and spelling

The Egoist の場合 phonological な問題はもちろん occasional spelling によって推察されるにすぎなく, 数も少ない。

- (1) "It was a *vaws*," Flicht replied in elegy. (*Italics mine*)

“A porcelain vase!” interpreted Sir Willoughby. (Chap. XVII, p. 173)

Vaws [vɔ:z] は COD では archaic であるとし、D. Jones も old-fashioned としてある。ここでは年老いた driver, Flitch のことばと考えられるが、vulgarism とも思われる。

(2) “Oh! Mrs. Montague, that is what the country people call *roemancing*.
……” (XXVI, p. 267)

Young Crossjay のことばで Standard English と考えることができるが “roemancing” はこの場合 “country people” のいう表現をまねたものであろう。したがって作品のスタイルには関係はないといえることができる。Roemancing (=? playing in a foolish manner, capering around. EDD) はおそらく [roumænsin] とよませるための occasional spelling であろう。

(3) “……It’s whether your blessing, your *Riverence* (i.e. Reverence), would disagree with another drop…….” (XXVI, p. 278)

Dr. Corney のことばの一部で Irish なまりを出すための occasional spelling とみられる。このような多少の例はみられるとしても、それは登場人物の方言を characterize するための一手段として用いられたものであって作品のスタイルとは直接に関係がないといえよう。作品全体に関連する問題として、発音に多少関係するが、spelling があげられる。この作品が大体は standard spelling で書かれているので問題は少い。しかも版によってはこの spelling が normalize されており、この点からスタイルを論ずることは現在の的には問題が残るように思う。ここには World Classics 版によった場合の spelling variation を若干あげるにとどめたい。

the *stedfast* women (III, p. 17)/several *assuageing* observations (XV, p. 149)/you are *ageing* (XVII p. 168)/He could *doat* on those…… (XVII, p. 171)/*rageing* beast (XXIII, p. 240), etc.

Notes: ‘stedfast’ は OED によれば14～19世紀までの形であり、18世紀からは steadfast も用いられている。従って19世紀以後における stedfast は rare or old-fashioned の語形と考えられる。‘doat’ は16世紀以後、‘dote’

は13世紀以後の語形で19世紀にはこの両形があったと考えられる。Ing 形については、age に ageing~aging の両形があることは知られているが他の場合については *OED* にも Jespersen にも言及されていない。このテキストの場合 -(n)ge [-(-n) dʒ] で終る語はいつも -e を保存しているように思う。これが Meredith の特徴であるのか、当時の一般の特徴であるのか、または何らかの文体的価値の指標（たとえば archaism など）になるのかはこれだけの資料からは決定できない。

このように音韻、綴字の問題を除外すれば次には、形態・文法の問題があるがこの作品について注意をひくのは単語の用法である。

§2 Gloss 語の選択で特に注意されるのは uncommon word の用法である。

- (4) ……it was an appalling fear on behalf of his naked eidolon (GK= image, phantom)……(XXIX, p. 300) (*OED* marks as “not naturalized”)
- (5) ……let him be caught solus (=by himself). (XXIX, p. 304) (*SOD* marks as “not naturalized”; *COD* notes “esp. in stage directions.”)
- (6) The Book, which……recommends the deglutition (=swallowing) of irony……(XLVI, p. 512) (*OED* marks it as “physiological term”).

これらの例は地の文に見出されるのであってこのような用法は何んらかの文体的な意味をもつものと考えられよう。たとえば scholarly な装いのためとか、literary and solemn な調子を示すためであるかもしれない。もっと皮肉に用いて comic effect or ironical effect を目標としたものかもしれない。それらの何れであるかは、それぞれの文脈、さらには作品全体を貫く作家の意図によって決定されるべきものである。

§3 Archaism いわゆる literary な文体にはしばしば archaism が見られるが、この作品にも、語彙、文法の面において見出される。

- (7) Heaven *forefend* a collision between cousins! (IV, p. 26)

- (8) ……gathering wild flowers for the *morrow* May-day (*Ibid.*) (*SOD* notes : “attrib. now only poet.”)
- (9) ……as any man in earnest……may be sure to *whelm* a young woman (XXII, p. 238) (*COD* notes : “poet. rhet.”)
- (10) Willoughby thundered on her sex. *Unto such brainless things as these do we*……confide our honour! (XXIII, p. 239) (Solemn な表現でありました mock-solemnity をあらわして comic effect をあげる場合でもありうる。)
- (11) ……he was aware of shouts of the names of Lady Busshe and Mrs. Mountstuart Jenkinson, *the which*, freezing him as they did, were directly the cause of his hurrying……. (XLIX, p. 535) (*SOD* notes : “archaic”).
このような語彙の外に文法上の archaism もある。
- (12) Also the tree beset with parasites prospers not. (I, p. 6) (Patterne 家の先祖の言葉として述べられており、そのため古文体を用いたものと考えられる。)
- (13) What *know they* of a critic in the palate, and a frame all revelry! (XX, p. 205) (これは rhetorical question であるから what do they know となるべきであるが Jespersen は “In the post-Elizabethan period questions without *do* are not at all rare, chief in more or less conscious archaic diction.” (*MEG*, V, 25, 55) と述べ、詩にその例の多いことを示している。したがってこれは archaic or poetic と考えられよう。)

§4 Vulgarism Archaism に対して vulgarism は会話の中にしか表われない。

- (4) “Bartlett, our old head-keeper, was a witness, my lady ; I had to drive half up the bank, and it’s true—over the fly did go ; and *the vaws it shoots* out against the twelfth milestone,……” (XVII, p. 174)

上の引用文で主語の反復については J. Wright は “In all the dialects of Sc. and Eng. there is a tendency to introduce a redundant personal pronoun

after a noun when emphasis is required ; this is especially frequent after a proper noun.” (EDG, §402) と述べている。(Notes : Jespersen, MEG, III, 3, 7, 5. “the resumption found so often in colloquial and vulgar speech.”)

(15) ……there was a Providence in it, for we all *come* together so as you might say *we was* made to do as we did. (*Ibid.*) (‘come’ = came, ‘we was’ = we were ; いずれも vulgarism である。)

(16) (C.) “I gave you a shilling, you ass!”

(J.) “You *give* me that sum, young gentleman……” (XXVI, p. 275)

この例は Crossjay と tramp の会話であり, give (=gave) は vulgarism である。

このように vulgarism は会話の中にあられるがそれも, 文全体が vulgar なスタイルで書かれているのではなく Standard English の表現の中に vulgar style を感じさせるような用法, 語法を若干示しているにすぎない。さらにまた sporadically にその特徴を示しているにすぎないということから考えても, この文体が作品全体の文体に影響を与えるものではないといえよう。

§5 Syntax これまでは Standard English の範囲外の特性に目を向けていたわけであるが, ここで再び目を Standard English の範囲内に向けなければならない。すでにこの作品には uncommon words が地の文でしばしば用いられていることに言及した。そこでここでは文法的に特異な表現を見なければならない。この問題も詳細に検討する必要があるけれどもここでは若干目につく問題を取りあげるにとどめる。

主語の構造から考えてみると, この作品の文にはいくつか目につく表現がある。

(a)第一は抽象名詞を主語とする表現である。

(17) Nothing can be done with a mature and stumpy Marine of that rank.

Considerateness dismisses him on the spot, without parley. (I, p. 8)

(18) And he had been once a young prince……; the world had been his possession. Clara's *treatment* of him was a robbery of land and subjects. (XXIX, p. 300)

(19) Laetitia's *anxiety* sat prettily on her long eyelashes……(XLVI, p. 508)

こうした抽象名詞，ことに Jespersen のいわゆる nexus-substantive による表現が文体上どのような効果を持つかは Jespersen の次の句から知ることができるとであろう。“When we express by means of nouns what is generally expressed by finite verbs, our language becomes not only more abstract, but more abstruse, owing among other things to the fact that in the verbal substantive some of the life-giving elements of the verb (time, mood, person) disappear. While the nominal style may therefore serve the purpose of philosophy, where, however, it now and then does nothing but disguise simple thoughts in the garb of profound wisdom, it does not lend itself so well to the purposes of everyday life.” (*Philosophy of Grammar*, p. 139).

この nexus-substantive の愛用は主語だけに限らず他の場合（たとえば例(18)の“robbery”参照）にもみられる。なお(20)(21)ではかえって印象が具体的な行動・状態を示していると思われる。

(20) Her quick nature realized the *out of prison* (=liberty) as vividly…… (XXV, p. 259)

(21) He hated the *having* to say it. (XXIX, p. 312)

動名詞も主語としてしばしば用いられているがこの用法はそれほど特異なものとは考えられない。

(22) ……*his coming to me*, and *his not doing as another* would have done, seemed……. (XLVIII, p. 531)

(23) Yes, and there was a guide, but he would disapprove, and *even he thwarting her away to sacred liberty* must be thrust aside. (XXV, p. 259)

この表現については Curme (*Syntax*, §50, 3, p. p. 490f) の“The participial clause competes here with the gerundial, but it is largely confined to colloquial speech: ‘*He saying* (present participle) he is sorry alters the case,’ or in the

literary language usually ‘*His saying (gerund) he is sorry alters the case.*’”が参考になる。

(b) Top-heavy sentence 述部に対して主語が wordy であるいわゆる“top-heavy”な文章が多い。

(24) ……were comparisons in quest, *the sympathetic eagerness of the eyes of caged monkeys for the hand about to feed them*, would supply one. (I, p. 9)

(25) *His logical coolness of expostulation with her when she cast aside the silly mission entrusted to her by Sir Willoughby and wept for herself*, was unheroic in proportion to its praiseworthiness. (XVI, p. 158)

(26) *The strangeness of men, young and old, the little things (she regarded a grand wine as a little thing) twisting and changing them*, amazed her. (XXIV, p. 249)

(24)~(26)の例については cumbersome and ‘top-heavy’ (Jespersen, *MEG*, VII, 4, 6) であるとはいいいきれないと思う。むしろ心理的には主語の部分が叙述であって、叙述部が after-thought ないしは話法表現における reporting part のような役割を果していると感じられる。

(c) Generic present 叙述動詞について考えてみるとこの作品が narrative であることから preterite tense を中心としていることは当然である (*Notes ; Curme, Syntax*, §37, 2: “This (*i.e.* the past tense) is the common tense of narrative, where one event is represented as going on in connection with another.”)。しかしその中にしばしば present tense が介入してくる。それはいわゆる generic present であって、一般的事実としてときには maxim, aphorism 的性格を与える。

(27) She was the solitary companion of a sick father,……The noise of the engagement merely silenced him (*i.e.* her father) ; recluse invalids *cling* obstinately to their ideas. (III, p. 19)

ここで recluse invalids は her father と recluse との両方について述べているのであって、この cling は generic な事実として述べながら間接には

her father の態度を述べているといえる。

(d) 修飾語がしばしば叙述部に挿入されまた主語に付加されて、このために主語—動詞の呼応が明確でなくなる場合がしばしばみられる。

(28) ……as he was in the act of turning on his heel at the end of the terrace, and it should be added, discoursing with passion's privilege of the passion of love to Miss Durham, Sir Willoughby, who was anything but obtuse, experienced a presentiment upon espying……. (I, p. 8)

このような修飾的な挿入部があることは、それが多ければ多しだけ文の成立への自然な進行をはばむものであり、それだけ表現として渋滞ないし停滞の印象を与えるのではあるまいか。この作品のテンポが遅いとしたら、その原因の一つはこのような文の構成にあると思う。

(e) Participle 分詞の用法は原則的には Standard English のそれと同様で決して特異なものではないが次の二つの点は注意してもよいであろう。

(29) ……the colonel replied, *departing*. (XLVII, p. 523)

付加的な分詞句はすべての作家に見られるがこの作品ではこのように単語の場合でも附帯状況を示すために時々用いられている。

(30) ……he had the appearance of a bankrupt tradesman *absconding*;…… (I, p. 8)

(31) ……the laughter *heard* is of a character……. (XLVIII, p. 534)

(32) ……if her sentiment for this gentleman was gone, it was only a delusion *gone*. (XLIX, p. 537)

このように分詞を後置して、その叙述的な力を強めて用いると思われる場合が多い。このような表現は当然次のような場合を予想することになる。

(33) Clara grateful, Clara softly *moved*, led him to think of Clara *melted*. (XLVI, p. 501)

分詞の用い方そのものは直接には文体的な価値よりも文法上の特性を多く持っている。したがって直接には文体につながらないかもしれないが表

現上の特質であることに変わりはない。ことに㉔のような表現が生れるとすればそれは clause の簡略な表現となりしかもこの例では Clara という image の明確な表現となるろう。

(f) Word Order 語順についていえば今日一般に見られる散文よりも倒置が相当に多いことに気づく。その主な理由は文頭に主語以外の語を置いて強調または前文との関連を示すわけであるが、時には literary style であることを示すものもある。

㉔ ……as shine he could when lit up by admirers,……. (XXIX, p. 307)

(Zandvoort (*A Handbook of English Grammar*, §19) は “I have my work to do, and do it I will” のような表現について, “confined to literary style” といっている。)

(g) Narration 一注意すべき点を述べるにとどめる。直接話法による表現は大體一般の原則に従って記述されているが話のやりとりの回想が次の形で表現されている場合もある。

㉕ Laetitia listened to their wager of nothing at all—a no against a yes—in the case of poor Fitch; and Clara’s ‘Willoughby will not forgive’: and De Craye’s: ‘Oh! he’s human’: and the silence of Clara……

このような表記は一見劇の表記を思い出させるが回想を劇的に表記したものともみべきであろう。話法についてももう一つ注意すべき事柄はいわゆる represented speech である。この作品では地の文 (narrative part) にしばしばこの形式があらわれるが、これらは represented speech 独特の文体的価値において用いられており、特にこの作品の反省的な性格を物語るものであるとも考えられる。ここではその一例をあげるにとどめる。

㉖ He clasped the visionary little feet to warm them on his breast.—*But Willoughby’s obstinate fatuity deserved the blow!—But neither she nor her father deserved the scandal. But she was desperate. Could reasoning touch her? If not, what would?* He knew of nothing. Yesterday he had spoken strongly to Willoughby……. (XXVI, p. 277)

§6 ここでさらに collocation の level における 特性を考える必要がある。

(a) J.R. Firth のいう “phonaesthetic meaning” (*Papers in Linguistics*, p. 198) の発見は困難であるが無意識であるにせよ alliterative な表現として “The door of a *hollow* chamber of *horrible* reverberation was opened within him by this remark.” (XVII, p. 169) のような例が見られ、また F.L. Lucas (*Style*, p. 229) が “Meredith’s prose had, indeed, another, poetic manner, which may even be thought, on the contrary, *too* metrical: ……But his more ordinary style, with its long, helter-skelter clauses and its jolting, jolting polysyllables, is usually at a very safe distance from verse.” と述べているように、metrical と思える passage がありはするものの全体としては “at a very safe distance from verse” な散文と考えられる。

従って phonological, rhythmic element は除外して表現形式とその意味の方に注意を集中してもよいのではないかと思う。

(b) 作品を通じて “formal” ということのできるような表現が多く、その場合 uncommon word が用いられているのが目立つ。

③) Popularity with men, serviceable as it is for winning *favouritism*¹ with women, is of poor value to a sensitive gentleman, anxious *even to prognostic apprehension on behalf of* his pride, his comfort and his *prevalence*². (XVII, p. 168) (Notes: 1. ‘favouriticism’ は SOD によれば earliest quotation が 1808 であるからこれはむしろ当時としては neologism に入るかもしれない。2. ‘prevalence’=influence であれば rare word である。)

③) Flicht *bestirred his misfortune-sodden features and members for a continuation of the doleful narrative.* (XVII, p. 173)

こうした formal な表現が作品に文体的に与えるものは courteous, pompous な色彩であるか、または literary style という印象であろう。

(c) 修飾語句を用いて記述を一層厳密にしようとしている場合、時に

は興味深い修飾語句の使用が見受けられる。

(39) ……Vernon had said things to render Miss Middleton more *angrily determined*……. (XVI, p. 158)

(40) ……to call consenting the same in fact as choosing, was *wilfully unjust*.
(*Ibid.*)

これらは叙述すべき事実に付帯する状況・感情を併記している。本質的にはこれと異らないが、対立した意味の語を結合する oxymoron 的表現もみられる。

(41) For he was of the order of gentlemen of the *obscurely-clear* in mind,
……(XXII, p. 225)

(42) Desirable as it was that they should be *united in disagreeing*, it reduced the romance to platitude……. (XXII, p. 229)

(43) ……he exclaimed with *rosy melancholy*: ……(XXIX, p. 297)

これらの例でわかるように多くの場合、意識的に oxymoron を用いたのではなく結果的に（偶然に）生じたにすぎないと思われるから文体的にはそれほど大きな役割を演じていないとも思われる。

(d) Transferred epithet 多少 rhetorical な色彩が感じられるいわゆる transferred epithet の場合(44)(45)、比喩表現ともいうべきもの(46)も collocation の一つと考えられる。

(44) She swam for a *brilliant* instant on *tears*, and yielded to the overflow.
(XVI, p. 165)

(45) ……everything was fuel; fibs, evasions, the *serene* battalions of *white lies*¹ parallel on the march……(XXV, p. 258) (Notes: 'white lie' = venial lie).

(46) The loyalty of De Craye to a friend, *where a woman walked in the drama*, was notorious. (XXIII, p. 238)

ここでは where a woman……の句は “so far as a woman is concerned” の意味でその比喩的表現ともいいうるのであろう。

§7 修辭的な面では restatement が多いことがあげられる。これによっ

て意味が amplify されることにはなっても、文としては wordy な性格を持って来る。Wordiness が amplification に役立つならば、意味の厳密さに通ずるわけで、よい意味での特性 (merit) になりうるが amplification でなくなればそれは饒舌である。饒舌はそれが comic effect を狙ったものでなく serious writing であるならば successful style にはならない。

(a) Restatement or amplification

(47) Plucking primroses was *hard labour* now—a *dusty business*. (IV, p. 27)

(48) Death's worm we cannot keep away, but when he has us we are *numb* to dishonour, *happily senseless*. (XXIV, p. 250)

(49) ……his adversary would not have yielded so flatly without an assurance of *practically triumphing, secretly getting the better of him*; …… (XXIX, p. 314)

これらはいずれも意味の amplification を伴った restatement といえる。

(b) Repetition この作家が非常によく用いる technique であって、ある場合は意味の amplification に役立つこともあるが、その主要な機能は話に連続性を与えることと思われる。さらに単に形式的な反復の場合もあるがこの場合の文体的な価値はまだ明らかにすることはできない。

(50) Yet she had by no means astonished him when her confession *came out*. *It came out*, she knew not how. (XVI, p. 159)

ここでは “she knew not how” (=unwittingly) が付加される。さらに “……she had done rightly to *come* and *come at once*” (XLI, p. 508) のように、単に強意に近い意味で反復されることもあり、この種の反復表現も多い。

(51) “But, Miss Middleton, for Sir Willoughby to grant such a request, if *it was made*……”

“*It was made*, and by me, and will be made again. ……” (XVI, p. 162)

これは Laetitia と Clara の会話であり、この会話の連続性を保ちつつ行なう転換が感じられる。同様な技法を次の例にみる事ができる。

- 62) There would be pangs for him too, that Third! Standing at the altar to see her fast-bound, soul and body, to another, would be *good roasting fire*.

It would be *good roasting fire* for her too, should she be averse.

(XXIII, p. 241)

- 63) Youth weighed her eyelids to sleep, though she was *quivering*, and *quivering* she awoke to the sound of her name beneath her window.

(XXIV, p. 250)

しかし例64では語の反復は形式の上だけであって jingles に近い面白味はあるとしても、上に述べた反復とは異質のものである。この例は多くない。

- 64) The fact became a matter of the *past, past* debating. (XXI, p. 208)

(c) Simile and metaphor

英語の表現として一般に固定した (established) 比喩表現は除外しても、なお数多く見出される。それらはごく平凡な metaphor, simile から、種々の段階のものが使われている。若干の例をあげると次のようなものがあげられよう。

(i) Simile

- 65) Both in thought and sensation she was like *a flower beaten to earth* (*i.e.?* miserable, nerveless and languid)……. (XXVIII, p. 295)

- 66) His blind sensitiveness felt *as we may suppose a spider to feel when plucked from his own web and set in the centre of another's* (*i.e.?* felt worried and awkwardly out of place. (XXIX, p. 309)

(ii) Metaphor

- 67) “……I should not have compassion for those lofty birds, the hawks. *To see them with their wings clipped* would amuse me. ……” (XVI, p. 166)

ここでは “men of haughty arrogance (like Sir Willoughby)” を hawk にたとえている。

68 “……and that was matter for *sickly green* (*i.e.*? jealous) reflections.

The lover who cannot *wound* has indeed lost anchorage; he is woefully *adrift*: he stabs air, which is to stab himself.……” (XXIV, p. 248)

ここでは67と異り3種の比喩 ① *green* cf. “green-eyed jealousy”, Shakespeare, *Merchant of Venice* III, ii); ② *wound-stab*; ③ *anchorage-adrift* が相ついで用いられている。67/68のような *metaphor* は比較的理解しやすいが69は *image* は明らかではあるが、散文的というよりはむしろ詩的というべきではなからうか。

69 “……she had never pulled him to earth’s level, *where jealousy gnaws the grasses*. (XXIII, p. 239)

比喩表現について F.L. Lucas は “I use the metaphorical to avoid the long-winded.” という Meredith のことばを引用しながら, “to Meredith there does belong the credit of seeing and stating the truth that metaphor need not be, as some suppose, an otiose and time-wasting ornament,……but can provide at times a most trenchant short-cut.” (*Style*, p. 207) と述べているが、少なくとも上の諸例から考えるかぎり “time-wasting” ではないとしても多かれ少なかれ *ornamental* であることは否めないであろう。

これらの比喩表現は会話にも地の文にも用いられているが *simile* について Laetitia のいうことばは Meredith 自身のものではないだろうか。彼女はこういっている。“*Similes have the merit of satisfying the finder of them, and cheating the hearer.*” (XLVIII, p. 528). したがってこれが Meredith の *simile* についての考えであればこれは *witty* な表現技法に価値 (*merit*) を認めていることになると思われる。さらに Laetitia は “*this is too serious for imagery*” (*Ibid.*) ともいっているが、もしこの *imagery* が比喩表現を意味するならば真に *serious* な叙述にはこの *simile* and *metaphor* はふさわしくないのであって、比喩の用いられる限り、対象は *objectify* され、*witty expression* の対象とされ、“*at ease*” に観察されて書かれていることになるであろう。

この手法は万事を客観的に comedy として観察しようとするこの作品の基本的態度と一致すると考えられる。

(d) Contrast 表現上の対位的構造はここで考察する余裕がないが次の諸例は作品に comic effect を与えることになるのではあるまいか。

⑥ (Sir Willoughby) "I tell you my sentiments *absolutely*."

(Lady Mounstuart) "And you have mine *moderately* expressed."

(XVII, p. 170)

⑦ The strangeness of men, young and old, *the little things* (she regarded a *grand* wine as a *little* thing) twisting and changeing them, amazed her. (XXIV, p. 249)

(e) Reference and allusion 作品中いたるところに古典その他への reference があり, Sir Willoughby の紳士ぶりをほめる Mrs. Mounstuart のことばにも "Alcibiades, fresh from a Louis IV perruquier, could not surpass him: …… (II, p. 10) のような reference がある。ここでそのすべてをつくすことはできないのでそのうちわずかな例をあげることにする。

⑧ ……he was intuitively a conjuror……, wanting no directions to *the herb he was to suck at when fighting a serpent*. (XVII, p. 168). cf. 'Herba sacra: The "divine weed", vervain, said by the old Romans to cure the bites of all rabid animals,……'. (Brewer)

⑨ Mr. Whitford meant well; he was conscientious, very conscientious. But he was not *the hero descending from heaven bright-sworded to smite a woman's fetters off her limbs and deliver her from the yawning mouth-abys*s. (XVI, p. 158). Prob. it means "the brave hero to rescue her from her difficulties". cf. 'Andromeda': ……she was …… chained to a rock, but was delivered by Perseus……. (Brewer).

こうした allusion, reference, quotation はやはり表現者の態度のうちに心理的なゆとりのあることを物語るものと考えてよいであろう。

(f) Pun あまり気づかなかったが次の場合は homophonic pun とする可能性がある。もしそうでなければ metaphor の一例である。

64) Laetitia と Vermon の会話である。

(V.) “……Consider her as a generous and impulsive girl, outwearied at last.”

(L.) “By what?”

(V.) “By anything ; by his loftiness, if you like. He flies too high for her, we will say.”

(L.) “Sir Willoughby an eagle?”

(V.) “She may be tired of his *eyrie*.” (XVIII, p. 182)

‘eyrie’ は ‘the nest of (esp.) an eagle, a high-perched human dwelling ; a noble stock of children’ (SOD) であるがここでは eyrie [éəri, fəri] が ‘airy’ (=superficial, flippant+assuming airs” (SOD) と連想され、そのために “The sound of the word in Vernon’s mouth smote on a consciousness she had of his full grasp of Sir Willoughby, and her own *timid* knowledge’ though he was not a man who *played on words*.” (Ibid.) という Meredith の説明が付加されたのではあるまいか。

これまで表現の様式を中心として考えてきたがさらにいくつかの表現の集った paragraph 次には chapter に注意を向けて、分析・記述しなければならない。しかしここに述べる余裕はないのでまとめてみると、物語の発展のテンポを妨げる digression (or episode) が多くこれは meditative な記述で、心理のうごきなり思索の内容(または心理の分析)を述べることがしばしばあるといえる。また各所にみられる表現上の device によって、このような serious になりがちな内容が気楽に書かれ、この作品の comedy としての性格にふさわしい表現形式をそなえている。

The Egoist について以上述べたような特色はごく cursory な survey であり、これを正確に記述するにはもっと多くの分析が必要である。しかし、Meredith の英語は基本的には formal or literary English であり、そこに種々の devices を用いて comic な effect を与えようとしていることはたしかであると思われる。そして A. Symons (*Diana of The crossways*, p. ix)

の批評のうちで彼の表現の device から考えて, “poetic, learned, intellectual” な style を用いているということだけはいいうると思う。

ここでは Meredith の *The Egoist* だけに注意を集中してきた。したがって以上の記述が Meredith に peculiar な特徴であるか否か, *The Egoist* に peculiar な特徴であるか否かは確信を持ってはいうことができない。そのためには同様の方法で他の作家, 他の作品を検討し, その結果と比較しなければならぬからである。

Bibliography

- Meredith, G., *The Egoist: A Comedy in Narrative* (The World Classics), Oxford Univ. Press, 1953.
- Brooke-Rose, C., *A Grammar of Metaphor*. London, Secker, 1958.
- Curme, G.O., *Syntax*. Boston, Heath, 1931.
- Firth, J.R., *Papers in Linguistics: 1934—1951*. Oxford Univ. Press, 1957.
- Jespersen, O., *Growth and Structure of the English Language*. Oxford, Blackwell, 1948.
- , *A Modern English Grammar*. 7 vols. 1914—1942, Copenhagen, Munksgard.
- , *The Philosophy of Grammar*. London, Allen, 1951.
- Lucas, F. L., *Style*. London, Cassell, 1958.
- Miyabe, Kikuo, *English Philology*. Tokyo, Kenkyusha, 1961.
- Wright, J., *The English Dialect Grammar*. Oxford Univ. Press, 1905.
- Zandvoort, R.W., *A Handbook of English Grammar*. London, Longmans, 1957.
- Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*. London, Cassell, Revised Edition, 1952.
- Partridge, E., *A Dictionary of Slang and Unconventional English*. London, Routledge, 1951.
- Wright, J. *The English Dialect Dictionary*. Oxford Univ. Press, 1898—1905.

筆者は本学助手・英語